

田  
置

嚴  
松  
竹  
心

一九五六年  
堀内一郎

堀内一郎



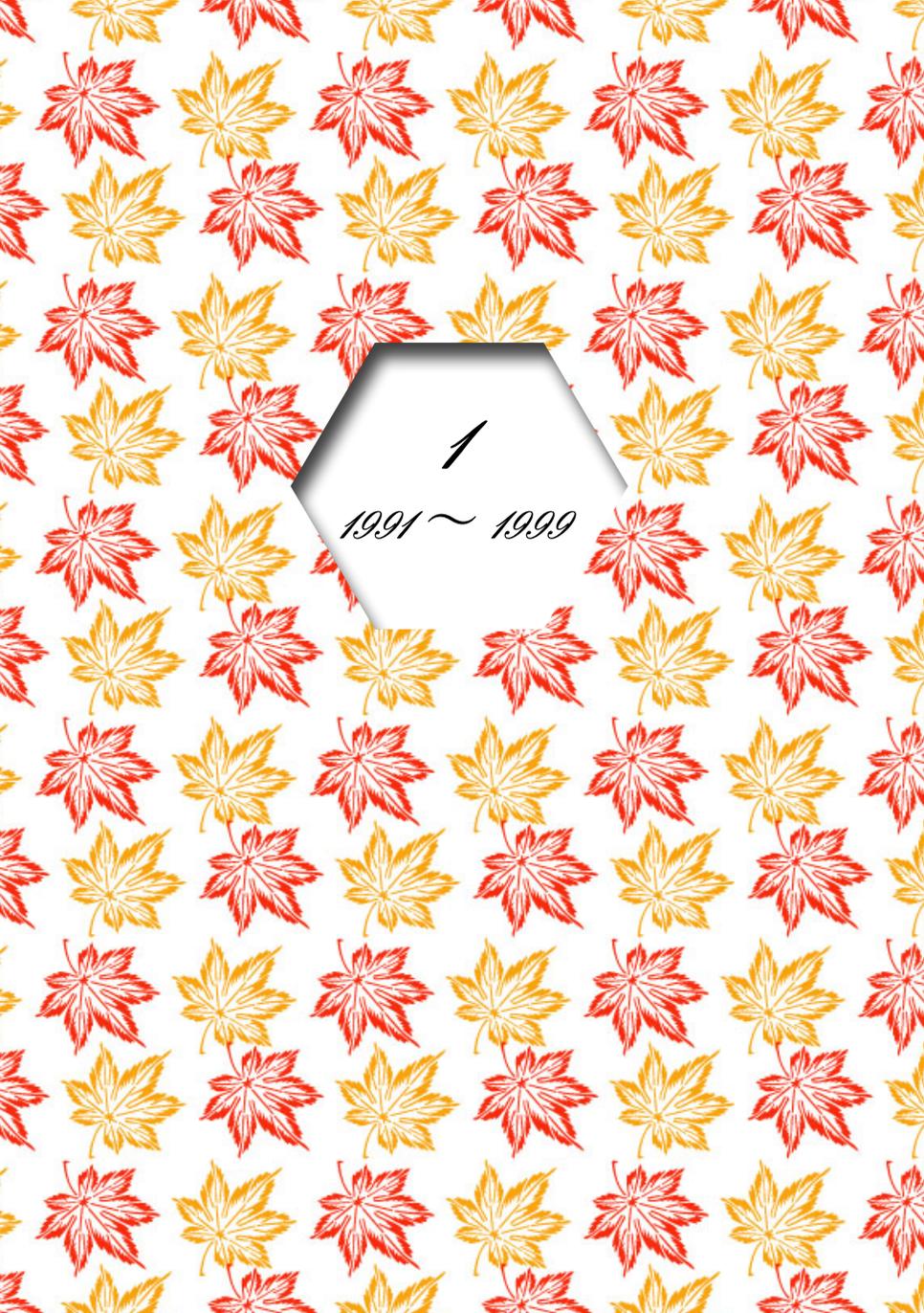


# 畳

堀内  
一郎

あを創刊十周年記念句集

限定百十部



1  
1991 ~ 1999



雪山はひと色で足る涅槃かな



神々は何か告げむと露のたう

ゆく春やたびたび數珠を袖圍ひ



天真の母  
呆気なく  
紫陽花よ

梅雨しとど  
ながきねむ  
りの枕花



亡母の七月米屋とうふ屋焼香す

夏山よ母の骨壺かたかた鳴る



佛法の蝉聞きながらさりながら

夏ゆくやきのふの瀧が身を反らす



母逝きて茄子のしぎ焼一度だに

燈火親し二の腕に第二藝術論



おとうとに家督勤労感謝の日

わたくしの櫻を植える雪の前



潜るたび無色になりぬかひつぶり

霜柱踏みたし白きベツトかな



ちりばめる梨月の義眼銀河冬

水温むぬくとまるとや甲斐ことば



晩年や思ひ通りに煮凝りて

ゆの  
中  
で  
體  
浮  
く  
な  
り  
遠  
郭  
公



海  
野  
格  
子  
堅  
繁  
格  
子  
春  
灯



暗  
き  
春  
灯  
君  
も  
ボ  
ル  
ガ  
の  
止  
り  
木  
に

春  
灯  
末  
摘  
花  
は  
暗  
が  
り  
に

佐  
原  
の  
過  
去  
じ  
い  
ん  
じ  
い  
ん  
と  
菖  
蒲  
酒



沙人ありし  
瓦人ありし  
日蝉しぐれ

青酸カリを分けし  
終戦の日の炎暑



母を葛父を芒と思ひつつ

憂国の徒はかなしめり一の酉



十二月八日草むす屍かな

雲水が通る白菜縦に割る



石楠書屋はくれむ冬芽忘れめや

風と来て垂浪の墓の梅白し



春さんさん大圓淨土亜浪の墓

眞直に立つ木に春の雲來たる



一枚の紙赤かりし櫻かな

夏  
怒  
濤  
人  
は  
器  
に  
従  
へ  
り



草に火を投げ石に火を置き川施餓鬼

月下美人を待つ満月は鬱の刻



目の見えぬものはよく鳴き秋の水

訪ねたくなる秋風の宝仙寺



戦争反対  
日出づる国の  
芒たち

源義  
句碑  
ひとり  
はなれ  
し芒  
かな



ケネデイ忌柿を眞つ赤に剥き終る

去りし日はみな雪の日の墓標かな



あたたかき母のからだや雪降り

鹽ひとつまみ豆腐一片雪の葬



枯木には文學館がよく似合ふ

文學館に来て梟になってゐる



凍死してから温かき布團かな

春眠や農夫の胸に鎌置かれ



湯豆腐と言ふ人情は酒れにけり

目の中の赤くなるまで火事を視る



曼珠沙華或る日俄に體冷ゆ

恐るおそる入りて雛の昔かな



藤房は顔のところで止りけり

生きものは水を啜へて天の川



零余子飯ボルガは遠くなり  
にけり

終戦の日は父母在りし芙蓉咲く



馬  
穴  
の  
水  
堀  
に  
ぶ  
つ  
け  
し  
防  
災  
日

終  
戦  
の  
日  
梅  
干  
を  
嚙  
む  
こ  
と  
に  
す  
る



九月のワイン男黙つて石になる

喜寿まではどうかと思ふ木の葉髪



これやこの石川明石枕花

父と母在りき雪の日の四畳半



降る雪やひろげて赤き絵双六

ゆく春やうす墨で書く一行詩



どくだみの花信号が赤になる

羅漢麦秋良寛もゐる  
兜太もゐる



冬木立妻の来るまで隠れけり

石鹼玉逃がすとすれば裏の山



情けある人大いなる蓮ひらく

初箒よせてはかへす波の音



一顧して金木犀の道なりけり

一郎が何人もゐて春惜む



父の日の海鞘を歯ぎしりして食うべ

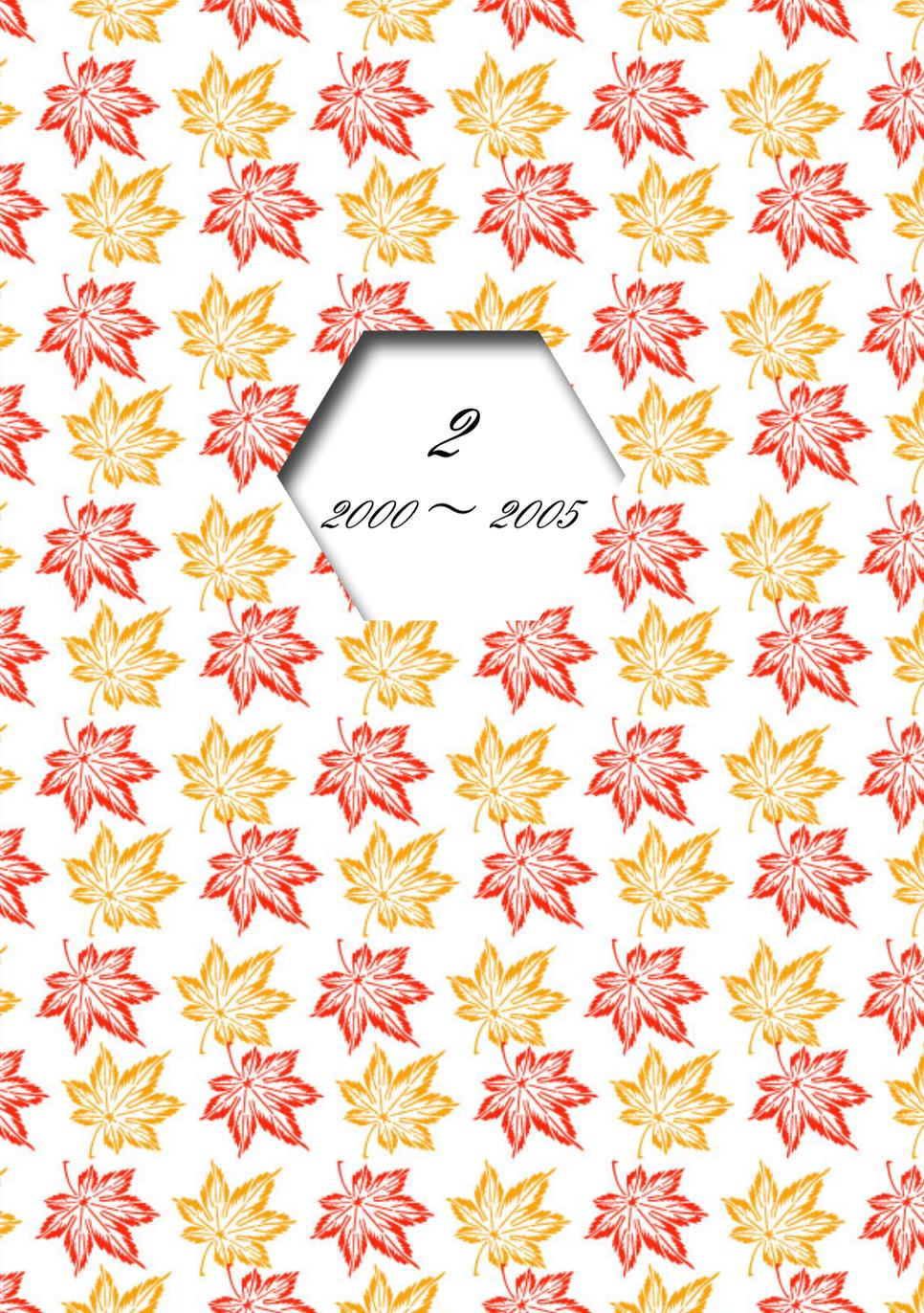
阿波踊りとは綿菓子のようなもの



く  
ら  
や  
み  
に  
高  
島  
茂  
三  
の  
酉

入  
獄  
を  
入  
所  
と  
言  
へ  
り  
芒  
み  
ち





2

2000 ~ 2005

白足袋のすりあしで来る卯波かな



渚にて化粧せしは、土用波



蜘蛛の糸ふしぎにとほき友来たる



垂浪忌の山門に入る吾も旅人



洋燈延子北迷美和佛年送る



一枚の紙うら返る去年今年



92

長男として初東風を真っ向に



93

真砂女の燐寸擦つて香焚く春の暮



鷹女像へふたたたび成田初まうで



大江戸線情にもろくて茄子の花



96

「楠公精神発揮せよ」終戦の日の赤とんぼ



97

老  
い  
ら  
く  
や  
一  
里  
歩  
み  
て  
昼  
ひ  
ぐ  
ら  
し



終  
戦  
日  
母  
が  
も  
ん  
ぺ  
の  
紺  
絣



この道も会津を指せり煙草に花



100

楽しくて妻の草刈り農そだち



101

秋  
ゆ  
く  
や  
高  
齡  
初  
犯  
う  
し  
ろ  
向  
き



獄  
窓  
秋  
の  
を  
み  
な  
を  
隠  
す  
や  
う  
に  
す  
る



受刑者秋思駿河箆笥を作りたる



受刑者に妻恋ひの句や渡り鳥



百歳の秋不死男展草田男も春一も



106

碧蹄館舞ふ黒い手袋朱のてぶくろ



107

木  
守  
柿  
離  
れ  
ば  
な  
れ  
に  
急  
が  
ぬ  
村



愛  
子  
さ  
ま  
は  
七  
歳  
厳  
と  
冬  
の  
朝



雪  
卍  
佐  
原  
囃  
子  
と  
お  
も  
ひ  
け  
り



十  
二  
橋  
辺  
り  
も  
時  
雨  
し  
て  
居  
ら  
む



さよならを言ふ雪山がよく似合ひ



112

豆を撒く枯れても大黒柱たり



113

深  
川  
を  
芭  
蕉  
と  
歩  
く  
霞  
か  
な



陽  
炎  
や  
柳  
行  
李  
で  
来  
し  
が  
母



耕  
運  
機  
五  
月  
農  
婦  
が  
き  
て  
跨  
が  
る



藤  
房  
の  
陰  
に  
三  
橋  
敏  
雄  
か  
な



七十を始まりとせり赤まんま



台風のつぎつぎにくる西瓜かな



正門は入口とせざ蓼の花



生きのびて妊娠土偶露八方



瀧  
春  
一  
瑞  
牆  
山  
が  
紅  
葉  
す  
る



三  
の  
酉  
俳  
句  
は  
と  
ほ  
く  
な  
り  
に  
け  
り



湯島の梅孫にもとめし鸞ふたつ



124

枯蓮を離れぬ妻を見てゐたり



125

尊者みな庵主に似たる著莪の花



真珠湾声まで日焼してかへる



やかなけり我が春愁の袖たもと



しばらくは与瀬古町の夏つばめ



柳  
町  
柳  
も  
無  
く  
て  
夏  
祭



長  
久  
院  
の  
隣  
で  
あ  
り  
し  
円  
朝  
忌



貝殻を集めてをりし妻の夏



132

金魚玉ひとに後ろは見せまじく



133

遠く  
ない  
話で  
墓を  
洗ひ  
をり



134

一  
本  
の  
滝  
た  
ち  
上  
る  
握  
り  
め  
し



135

歌舞伎町の女と言はれ十三夜



136

人に厭きて十二月の河馬を見る



137

ほ  
ど  
ほ  
ど  
に  
酒  
も  
縁  
や  
春  
一  
忌



寒  
卵  
だ  
か  
ら  
人  
差  
指  
を  
出  
す



石の上にも三年と言ふ桜もち



140

手賀沼やずきんずきんと蘆の角



141

一面に落花白紙を踏む畏れ



142

身動がず病牀五尺かたつむり



143

満身創痕あぢさみの色変はる



144

傷兵も見しこの病院の青筑波



145

六月の横たへし身の白さかな



147

裸運ばれ俎板の鯉になる日



146

病院から最後の旅へほととぎす



148

裏筆に朱を点じたる大き蓮



149

乳首の上の黒子や秋暑し



苦勞かけしと山梔の花に言ふ



石に  
貌あり  
秋風の  
尾に  
坐る



夜長  
妻哀れ  
私を  
介護  
する



青峰居ありし裏みち白木槿



ふとこゝろに風あつまりし天の川



信子から注いで貰ひしビールの泡



桂信子渡りし神田川も冬



初空襲早稲田でありし蓬もち



風ときて亜浪の梅の白さかな



照明弾を吊り三月の町燃ゆる



161

春宵一刻B29の巨き翼



160

避難所は川の向うや春ともし



高粱米を負ひ春の夜の葛西橋



溺死累々親子のそれと春運河



164

空襲三月妻をのこして帰らぬ人



165

男  
仰  
臥  
を  
ん  
な  
う  
つ  
伏  
せ  
春  
婆  
娑  
羅



166

ト  
ラ  
ツ  
ク  
に  
屍  
を  
載  
せ  
春  
の  
雲



167

陽  
炎  
や  
亀  
戸  
駅  
は  
骨  
の  
嵩



亀  
戸  
天  
神  
鳥  
居  
の  
こ  
し  
て  
霞  
か  
な



上野まで髪焦げし人春ひとすじ



170

天皇陛下万歳と言ふさくらかな



171

花  
咲  
く  
や  
散  
る  
や  
ま  
さ  
か  
の  
時  
来  
る



172

つ  
つ  
じ  
か  
ら  
つ  
つ  
じ  
へ  
歩  
く  
仏  
た  
ち



173

即身佛  
緞子あぐるや  
新樹光



175

さみだれを旅のはづみに  
最上川



174

湯殿山はだし詣でや雪のこる



176

白をもて会津に入らん夏帽子



177

英世の言葉まぶしき白つつじ



178

天井の分だけ畳明易し



179

緑陰に涙あつめしレノンの碑



金婚へナイヤガラ  
の滝とどろける



紐育にて紫陽花の青い時間



秋の風グラウンドゼロをつつ抜けに



二の酉やボルガへ遠くなりし道



湿生花園月見団子を奉る



唐辛子一寸先は見えぬもの



186

十二月八日銃後はうつくしく



187



3

2006 ~ 2010

やかなけりたつぷり使ひ年送る



灯さずに自転車  
がくる北京の冬



風音と梅ひらく音別にあり



厠使用一元と言ふ寒さかな



銅  
像  
の  
う  
し  
ろ  
へ  
廻  
り  
囀  
れ  
り



甲  
州  
市  
笛  
吹  
市  
山  
笑  
ひ  
け  
り



石  
夫  
逝  
く  
嘯  
遠  
き  
日  
の  
ま  
ま  
に



嘯  
に  
裏  
表  
あ  
り  
神  
田  
川



手ぬぐひまで涙を拭きに大暑の日



深川に簾編む音のこりけり



虹見しと言ふ幸せを分ちあひ



200

シドニーは春旧き煉瓦を積みかさね



201

オペラハウスへさようなら夏帽子



202

木にのぼるから秋風が見えてくる



203

葡萄取り入れつひ口遊ぶ縁故節



205

立冬や男と言へど針しごと



204

賀状一枚暮にこの世を去りし人



207

グランドゼロ何んだかんだと秋の風



206

林  
芙  
美  
子  
も  
ん  
ど  
り  
打  
つ  
て  
冬  
日  
射



209

人  
生  
と  
言  
ふ  
毀  
れ  
も  
の  
年  
は  
じ  
ま  
る



208

枯れ枯れて四の坂八の坂見ゆる



210

見詰めあふ吾と弟よ春深き



211

自  
転  
車  
を  
漕  
ぐ  
弟  
に  
こ  
の  
世  
の  
春



212

癌  
ひ  
と  
つ  
無  
罪  
放  
免  
飛  
花  
落  
花



213

とりあへず蕎麦を食べんと更衣



214

末広亭一番太鼓花ちるや



215

先生と遂に呼ばれて茄子の花



216

あぢさゐを袂に入れて死するべく



217

弟が杖ついできし暑中見舞



青嵐道は六百八十里



御  
輿  
も  
む  
弟  
の  
影  
そ  
れ  
と  
な  
く



221

弟  
の  
夏  
六  
文  
銭  
と  
登  
山  
靴



220

弟へ巨峰一房盆の入



222

遺影を抱いて台風がそれてゆく



223

やかなけり使はずと決めつづれさせ



225

もの忘れわすれぬ唄に赤とんぼ



224

さくら紅葉耳のうらから眠くなる



226

紀元節銃後真白き割烹着



227

曾孫生れ枯木に花を咲かせたり



堂裏を廻るが慣ひ著莪の花



鯉のぼり深呼吸してまた泳ぐ



230

墓を出て紋白蝶になつてゐる



231

源流へ水無月の雲とさかのぼる



232

一声は二声に似て夏つばめ



233

雲に入り霧を出て濃し草もみぢ



235

私にも百歳の夢夏ゆくや



234

ジ  
ー  
パ  
ン  
の  
膝  
ぬ  
け  
て  
ゐ  
る  
寒  
の  
入



237

こ  
こ  
に  
も  
筆  
あ  
そ  
こ  
に  
も  
筆  
冬  
籠



236

春  
浅  
し  
帽  
子  
美  
人  
と  
言  
は  
れ  
け  
り



幾  
度  
も  
息  
を  
吸  
は  
さ  
れ  
寒  
半  
ば



哲学は難しからず花見酒



241

鬼遣らひまた温めて笙の笛



240

今も別れははくれんの開くとき



242

またの日のおほかたはなき桜かな



243

片道キップ夏帽は水平に



245

寺の縁切るかきらぬかつつじ緋に



244

庖  
丁  
で  
叩  
く  
揚  
げ  
玉  
暑  
気  
払  
ひ



247

朝  
夕  
の  
水  
を  
搦  
み  
て  
母  
の  
夏



246

いちろうやはにしみとほる秋の酒



249

石畳ふむも供養や秋の水



248

毎日の遊びに馴れて鴨の水



250

界限に石菫咲き女盛り過ぐ



251

雪をんな白いマスクをして来る



252

俳句とは縦に書くもの水温む



253

白梅がたつぷり空っぽの町に



255

四谷から歩いて帰る春の風邪



254

水  
平  
に  
終  
了  
証  
書  
山  
笑  
ふ



256

長  
寿  
眉  
と  
言  
は  
れ  
そ  
の  
気  
に  
万  
愚  
節



257

ちる桜手を結ぶ子と結ばぬ子



258

さまよひて著莪の白さになってゆく



259

歩  
み  
き  
て  
そ  
の  
他  
大  
勢  
春  
の  
水

疊  
終





## 畳

著者 堀内一郎  
発行日 2010年11月13日  
発行人 佐藤喜孝  
装丁 佐藤喜孝  
発行所 竹僊房  
製本所 花岡製本所

二〇〇一年創刊の「あを」は来年で十周年を迎えます。「九邀」の詩のやうに「花を藝ひゑて以て蝶を邀ひふべし。書を藏して以て友を邀ひふべし。徳を積みて以て天を邀ひふべし。」ではありませんが、正に良友を邀へるべき俳句を作る、これが「あを」の二つの目標です。そのころを形に表したのがこの「限定一部」の句集です。

この句集はあを編集部のデータベースにある『あを』『飛行船』『獐』句会・吟行等のデータより作家各人が二百五十句抄出し発表年代順に一本にまとめたものです。句集名は喜孝が興の赴くまま付けさせていただきました。

二〇一〇年十一月八日

佐藤喜孝